

江戸時代以前の「人魚」像

—— 日本における「人魚」像の原点へのアプローチ ——

九頭見 和 夫

I. はじめに

これまでの「人魚」像の解明では、「人魚」出現に関する文献が比較的多く確認された江戸時代に焦点をあて分析を進めてきたが、今回は日本における「人魚」像の原点をさぐるためさらに時代をさかのぼり、例えば奈良時代前期に完成したわが国最古の勅撰の正史『日本書紀』等に登場する「人魚」像を分析する。すでに紹介した藤沢衛彦の『日本伝説研究二』¹⁾によれば、人魚が出現した最古の記録として、「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う(伝説)」とある。しかしこの伝説については、口承という伝説の持つ特性によるのか、残念ながら出所を証明する文献を確認できないため、本論においては、人魚出現を記録した日本最古の資料として前述の歴史書『日本書紀』(720年)をまず取り上げる。つぎに平安時代中期に源順によって編纂されたわが国最初の漢和辞書『倭名類聚鈔』と中国の漢時代の地理書『山海経』との関係を分析する。以下鎌倉時代中期に橘成季によって著わされた説話集『古今著聞集』、鎌倉幕府の書記たちによって執筆されたと伝えられる『吾妻鏡』、南北朝時代以降に多くの人々によって書き継がれ成立したとされる軍記物語『太平記』と中国の漢時代の歴史家司馬遷著の歴史書『史記』との関係に着目し、さらに「江戸時代の人魚像」執筆後に資料を確認できた江戸時代前期に成立した三浦浄心の仮名草子『北條五代記』、佐々木氏郷の歴史書『江源武鑑』、黒川道祐の随筆『遠碧軒記』についても分析を試みることにする。

II. 奈良時代の人魚—『日本書紀』と聖徳太子

日本最古の歴史書『古事記』が成立した8年後

の養老4(720)年、勅命によって舎人親王を総裁として編纂された歴史書『日本書紀』が完成する。『日本紀』とも呼ばれ全30巻からなる『日本書紀』の場合には、『古事記』が神話や伝説を重視し国内向けの文学書的色彩が濃いといわれているのに対し、中国や朝鮮等近隣諸国を意識して「日本」という国名を標題にかかげ、歴史的事実を重視した編纂が行われている。例えば『古事記』の場合全3巻のうち一巻が神代関係であるのに対し、『日本書紀』の場合には神代関係は全30巻のうちの2巻のみで残り28巻は神武天皇以後の詳細な歴史的事実の記述に費やされている。

「人魚」の記述が認められるのは、「卷第二十二」の推古天皇二十七年の条である。

二十七年の夏四月の己亥の朔にして壬寅に、近江国の言さく、「蒲生河に物有り。其の形、人の如し」とまをす。

秋七月に、摂津国に漁父有りて、罟を堀江に沈けり。物有りて罟に入る。其の形、児の如し。魚にも非ず、人にも非ず、名けむ所を知らず。²⁾

最初にこの記述の時代背景について考察すると、推古天皇27(619)年といえまだ飛鳥時代のことで、推古天皇(554年-628年)の即位(593年)とともに皇太子となった聖徳太子(574年-622年)が、摂政として仏教の興隆、遣隋使の派遣、憲法17条の作成など権力をふるっていた頃である。一方ヨーロッパでは、マホメットがこの頃(610年頃)イスラム教を創始している。

前述の『日本書紀』の記述の中で特に注目しなければならないのは、「其の形、人の如し」とか、「其の形、児の如し。魚にも非ず、人にも非ず」と人魚を連想させる言葉を用いているが、「名けむ

所を知らず」とあるように明確に「人魚」という表現が用いられていないことである。舎人親王たちの集めた史料には「人魚」という言葉はまだ存在しなかったものと思われる。ところが人魚出現当時摂政であった聖徳太子の生涯を記録した『聖徳太子伝暦』には以下の記述があり、聖徳太子が「人魚」という言葉を用いたことになっている。

太子、左右ニ謂ヒテ曰ク、禍此ニ始ル。夫レ人魚ハ瑞ニ非ル也。今飛菟無クシテ人魚出ヅルハ、是レ国禍ト為ス。汝等之ヲ識レ。³⁾

これらの言葉をすべて聖徳太子自身が発したとすることは疑問が残る。人魚が蒲生河（現在の滋賀県を流れる日野川）に出現した当時摂政であった聖徳太子が実際に「人魚」という言葉を用いていたならば、勅命で編纂された『日本書紀』の記述にも当然反映していたはずだからである。『日本書紀』の記述から判断して、『日本書紀』が完成した720年頃には少なくとも日本においては「人魚」という言葉はまだ使用されてはいなかったのではないのか。おそらくは『聖徳太子伝暦』を著わした後世の人たちが、9世紀に日本に伝来したといわれる『山海経』などをヒントに、「魚にも非ず、人にも非ず」といわれた生物に聖徳太子の言葉として「人魚」の文字を用いたと推測される。

この『聖徳太子伝暦』で注目すべきことが他にもある。人魚の出現を瑞兆どころか明確に国禍とみなしていることである。人魚の出現を凶兆とする考え方は、『山海経』の影響を受けた『倭名類聚鈔』、および『古今著聞集』刊行の頃までは認められず、鎌倉時代後期成立の『吾妻鏡』、および『北條五代記』等においてようやく確認されることである。聖徳太子が人魚の出現を国禍とみなしたとの記述もまた『聖徳太子伝暦』を書いた執筆者の創作なのであろう。

III. 平安時代の「人魚」—『倭名類聚鈔』と『山海経』

わが国最古の漢和辞書といわれる『倭名類聚鈔』は、醍醐天皇の第四皇女勤子内親王の命を受けた源順(911年-983年)の編纂によって承平年間(931

年-937年)頃に成立する。本書は、撰者の源順が歌人で和漢の才に秀でた学者ということもあって、単に漢和辞書としてだけでなく、例えば「人魚」等当時の文物百般についての解説が施された、いわば百科事典的性格をも兼ね備えた辞書である。なお本書には、原形とされる十巻本、十巻本を合冊した五巻本、後世の人が増補したとされる二十巻本の三種類があり、例えば二十巻本の場合、本文は32部249門から構成されている。「人魚」は、「巻十九、鱗介部三十、龍魚類第二百三十六」の中に、「^{カツオ}鯉魚」等63種類の魚類と共に分類されている。

人魚 兼名苑云、人魚一名鮫魚、上音陵、魚身人面者也。山海経注云、聲如小兒啼、故名之。⁴⁾

源順は、本書編纂にあたって漢籍262種、国書22種、仏書7種、総計291種の文献を用いたが、「人魚」の場合の出典、『兼名苑』も『山海経』もいずれも漢籍で、人魚とは身体が魚で顔が人間、小児の泣く声に似ていると記している。人間とも魚とも区別がつかないということでは『日本書紀』の記述と類似しているが、泣く声が小児に似ていることについては『日本書紀』にも、『聖徳太子伝暦』にも書かれていない。ここで源順の解説の内容を確認するため、二つの出典の中で特に「人魚」等魚身人面の生物についての記述が随所に認められる『山海経』を検証する。

中国の漢時代の地理書『山海経』は、全体が18巻から構成されているが、成立順に最も古いのが「五藏山経」5巻で、ついで「海外四経」4巻、「海内四経」4巻と続き、これら13巻においては国内外の山や海についての地理上の説明の他に、その地域にすむ異物、例えば「人魚」等についても記述されている。他に「大荒四経」4巻と「海内経」1巻があるが、これら5巻は後世に付加された部分とみなされている。

「人魚」等魚身人面の動物の記述が多く認められるのは、「五藏山経」、特に「中山経」、と「海内四経」である。なお魚身人面の動物、つまり人面魚につけられた名称は、人魚、赤鱸(せきじゅ)、氐

人（ていじん）、陵魚（りょうぎょ）、鯨魚（ていぎょ）の5つである。

(1) 「人魚」（西山経、北山経、中山経）

又東北二百里，曰龍侯之山，無草木，多金玉。決決之水出焉〔音訣〕，而東流注于河。其中多人魚。其狀如鯨魚四足，其音如嬰兒〔鯨見中山経。或曰，人魚即鯢也。似鮎而四足，声如小兒嘯。今亦呼鮎為鯢。音蹇〕。食之無癡疾。（「北山経」）⁵⁾

(2) 「赤鯢」（南山経）

又東三百里，曰青丘之山。其陽多玉，其陰多青護。有獸焉。其狀如狐而九尾，其音如嬰兒，能食人。食者不蠱。有鳥焉。其狀如鳩，其音若呵。名曰灌灌。佩之不惑。英水出焉，南流注于即翼之澤。其中多赤鯢。其狀如魚而人面，其音如鴛鴦。食之不疥。⁶⁾

(3) 氏人（海内南経）

氏人国在建木西。其為人面而魚身，無足〔盡胸以上人，胸以下魚也〕。⁷⁾

(4) 陵魚（海内北経）

陵魚人面手足魚身，在海中。⁸⁾

(5) 鯨魚（北山経、中山経）

又東五十里，曰少室之山。百草木成困。其上有木焉。其名曰帝休。葉狀如楊，其枝五衢，黃華黑実。服者不怒。其上多玉，其下多鐵。休水出焉，而北流注于洛。其中多鯨魚。狀如鰐螈而長距，足白而對。食者無蠱疾，可以禦兵。（「中山経」）⁹⁾

最も記述が目立つのは、「中山経」を中心に出現する「人魚」である。まず「人魚」の生息地についてであるが、「人魚」がすむのは、引用した「北山経」の場合だけでなく、「西山経」や「中山経」の場合でもすべて川の中である。江戸時代以降では、例えば井原西鶴の「命とらるる人魚の海」（『武道伝来記』）のように、海にすむ人魚がほとんどである。ヨーロッパでも川にすむのは、ライン川で舟人を誘惑する水の妖精「ローレライ」等少数で、例えばアンデルセンの『人魚姫』も海底にすんでいる。明治以降の文学では、谷崎潤一郎の『人魚の嘆き』に登場する人魚の故郷がオランダを流れる

ライン川で、これは珍しいケースである。つぎに「人魚」の容姿であるが、鯨魚のように足が4本あり、その声は赤子のものであるといわれているが、他の人によれば、人魚とは、「鯢」（サンショウウオ）のことで、「鮎」（ナマズ）に似ていて足が4本あって、声は小児が泣く時のようであるとのことである。人間の場合も、かりに手も足の一部とみなせば、足が4本あることになる。声が人間の小児の泣く声に似ていることは興味深いことである。「人魚」の効能については、「人魚」を食べると、痴呆症にならない、つまりボケずに長生きする。このことは、「人魚」を食べて八百才まで長生きしたという「八百比丘尼伝説」と無関係ではあるまい。かりに「人魚」がサンショウウオのことであるとすると、本草学的にサンショウウオが古来精力剤として重宝されてきたことも納得できるのである。

つぎに「人魚」という名称は用いていないが、「人魚」を連想させる魚身人面の生物の中から特に「人魚」の解説の際に登場した「鯨魚」について考察する。鯨魚の容姿は、鰐螈のようではげめが長く、足は白くて対になっているという。「鰐螈」については本文に「未詳」とあり定かでないが、本書の訳者前野直彬の「注」には、猿の一種、「鯨魚」については「サンショウウオ」とある。「鯨魚」の効能については、鯨魚を食べると、「蠱疾」にかかることがなく、剣難を回避できるという。「蠱」とは、食べた者は必ず死ぬといわれて恐れられた虫のことで、転じて人を悩まし惑わすものをいい、「蠱疾」とは冷静な判断力を失うほどに心が乱れる病、惑乱の病気のこととされている。以上「人魚」や「鯨魚」の解説でも明らかなように、『山海経』は単なる地理書に留まらない、本草書としても注目すべき文献である。

『倭名類聚鈔』の「人魚」の解説に引用された『兼名苑』の説明にも登場した「陵魚」は、その容姿が「人魚」と同じく人面魚身であるが、「人魚」とは明らかに異なるのが生息地で、川ではなく海中である。鯨魚、これから分析する氏人国に住む氏人や赤鯢も容姿こそ人面魚身であるが、生息地は

海ではない。陵魚は、『山海経』に登場する「人魚」や人魚に類する人面魚身の生物の中で唯一海に生息している珍しい存在である。

氏人国に住む氏は、人面魚身、胸から上が人間の姿をし胸から下は魚の姿をしている。「人魚」と明らかに違うのは、足がないことで、「鯨魚」や「陵魚」にもみられないことである。

「赤鯪」の特徴は、顔は人間に似ているが、声はオシドリの鳴き声に似ていることで、また効能についてはこの魚を食べると、皮膚病の疥癬にかからないことである。「人魚」との明らかな相違は、発する声で、人間の小児の泣き声ではなく、オシドリの鳴き声に似ていることである。

IV. 鎌倉時代の「人魚」

1. 橘成季の『古今著聞集』

鎌倉時代中期(1254年)に成立した『古今著聞集』は、下級官吏であった橘成季(生没年不詳)によって『今昔物語』等を採り入れて編集された説話集である。古代貴族社会に対する編者の懐古思想を底流とする本書は、全説話数726段、全段の約三分の二が奈良・平安両時代の説話、約三分の一が鎌倉時代の説話、が20巻30編に分類され、各編の冒頭で関係事項の由来等が概説されている。「人魚」に関係する説話が掲載されているのは、巻第二十、第三十編「魚虫禽獣」、第七百十二段である。「段」の題名は、「712 伊勢国別保の浦人人魚を獲て前刑部少輔忠盛に献上の事」とある。

伊勢国別保といふ所へ、前刑部少輔忠盛朝臣くだりたりけるに、浦人日ごとに網をひきけるに、或日大なる魚の、かしらは人のやうにてありながら、齒はこまかにて魚にたがはず、口さしいでて猿ににたりけり。身はよのつねの魚にてありけるを、三喉ひきいだしたりけるを、二人してにいたりけるが、尾猶つちにおほくひかれてけり。人のちかくよりければ、たかくをめくこゑ人のごとし。又涙をながすも人にかはらず。おどろきあさみて、二喉をば忠盛朝臣のもとへもてゆき、一喉をば浦人とりてけり。忠盛朝臣おそれけるにや、

すなはち浦人にかへしてければ、うらみみなきりくひてけり。されどもあへてことなし。そのあぢはひことによかりけるとぞ。人魚といふなるは、これていの物なるにや。¹⁰⁾

この「人魚」らしき魚が3匹三重県の別保で網にかかった時期は、藤沢衛彦の『日本伝説研究二』によれば、平安時代後期の「崇徳・近衛帝御宇頃(1140年前後)」とあり、『古今著聞集』が完成する百年以上も前のことである。この「人魚」の話で注目したいのは、「人魚といふなるは、これていの物なるにや」の個所である。編者の橘成季は、何らかの方法で「人魚」についての知識を有していたと思われる。この魚の頭は人間に、口は猿に似ていること、高く叫ぶ声が人の声に似ていることなどが参考になる。口が猿に似ているという容姿は、『山海経』の「鯨魚」についての説明と一致する。叫び声が人の声に似ていることは、『山海経』の「人魚」等の説明に一致する。おそらく『山海経』から橘成季は「人魚」についての知識を得たものと推測される。10世紀に成立した漢和辞書『倭名類聚鈔』も当然彼は読んでいたと思われるが、「人魚」の口が猿に似ているという記述はない。ところで人魚が「涙をながす」ことについては何から得た知識なのであろうか。彼の完全な創作なのか、あるいは参照した文献があるのか。人魚の肉が美味であったことについては、「八百比丘尼伝説」の影響と思われる。

2. 『吾妻鏡』

鎌倉幕府の役人たちによって執筆され鎌倉時代後期(正安頃)に成立したとされる『吾妻鏡』は、治承4(1180)年の源頼朝の挙兵から文永3(1266)年の六代將軍宗尊親王の帰京までの87年間を編年体で記述した歴史書である。本書については諸本があり、主なものとしては、全五十二巻の「北條本・島津本」と全四十七巻の「吉川本」があるが、「人魚」らしき魚出現の記述があるのは、吉川本では、「巻三十六」、北條本では「巻三十八」の頼嗣將軍治下の宝治元(1247)年5月29日の条である。なお以下の引用は、「吉川本」による。

三浦五郎左衛門尉参左親衛御方、申云、去十一日、陸奥国津軽海辺、大魚流寄、其形偏如死人。先日由比海水赤色事、若此魚死故歟、随而同比奥州海浦波濤赤而如紅云々、此事則被尋古老之處、先規不快之由申之、所謂文治五年夏有此魚、同秋泰衡誅戮、建仁三年夏又流来、同秋左金吾有御事、建保元年四月出現、同五月義盛大軍、殆為世御大事云々、¹¹⁾

この『吾妻鏡』の記述で特に注目したいことが2点ある。第一点は、「大魚流寄、其形偏如死人」と「人魚」を連想させる表現が用いられているが、明確に「人魚」という言葉は用いられていないことである。すでに刊行されている『倭名類集鈔』や『古今著聞集』、および『山海経』など中国から伝来した本においては「人魚」という言葉が用いられている。『吾妻鏡』を執筆した鎌倉幕府の書記たちはこれらの本に接することはなかったのであろうか。第二点は、人魚とおぼしき「大魚」が出現した年になぜか鎌倉幕府を揺るがすような大事件が発生していることである。「宝治合戦」が発生した宝治元（1247）年以前にも、源頼朝の奥州征伐が行われた文治五（1189）年、源頼家が暗殺された建仁三（1203）年、和田義盛が挙兵した建保元（1213）年に死人に似た「大魚」が出現している。この人魚とおぼしき「大魚」の出現を国禍とみなす考え方は、『聖徳太子伝暦』でも認められたが、両書の刊行された時期等を考慮すると、偶然の一致なのであろう。

V. 南北朝時代の「人魚」—『太平記』と司馬遷の『史記』

14世紀中頃から書き始められ、複数の人々の手によって書き継がれて南北朝時代末期の応安（1368年-1374年）から永和（1375年-1378年）の頃に成立したとされる『太平記』は、南北朝五十余年にわたる紛争を記録した軍記物語であるが、作者は明らかでなく、記録として残されているのは小島法師（生没年等不詳）一人である。本書は、全40巻、三部から構成され、北條高時の失政と建武中興、特に楠木正成の活躍を中心として描いた

「巻十一」までの第一部、新田義貞打倒による足利尊氏の政権奪取と後醍醐天皇の崩御を描いた「巻十二」から「巻二十一」までの第二部、欠巻の「巻二十二」の後の「巻二十三」から終巻の「巻四十」までの第三部では、「観応の擾乱」を中心に足利尊氏の死、および有力守護大名と公家勢力の没落が描かれている。「人魚」の記述が認められるのは、「巻第二十八」の「慧源禅巷南方合体事付漢楚合戦事」の個所である。

天ニハ金銀ヲ以テ日月ヲ十丈ニ鑄サセテ懸ケ、地ニハ江海ヲ形取テ銀水ヲ百里ニ流セリ。人魚ノ油十萬石、銀ノ御錠ニ入テ長時ニ灯ヲ挑タレバ、石壁暗シトイヘ共青天白日ノ如ク也。此中ニ三公已下ノ千官六千人、宮門守護ノ兵一萬人、後宮ノ美人三千人、楽府ノ妓女三百人、皆生ナガラ神陵ノ土ニ埋テ、苔ノ下ニゾ朽ニケル。¹²⁾

人魚の油を銀の皿に盛り火をつけたところ、石壁の周囲が青天白日のように明るくなったとあるが、このように人魚の油が燈火として用いられることについては、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』や大槻玄澤の『六物新志』にも記されているが、これらの作品より成立時期の早い『太平記』の場合、この知識を作者はいかなる文献から得たのであろうか。『六物新志』には、「史記秦本記曰以人魚膏為燭」¹³⁾とあり、漢の司馬遷著『史記』からの引用であることが記されている。『太平記』の著者もまた『史記』を参照したと判断してよいのか。なお『史記』で「以人魚膏為燭」の一文が認められるのは、「秦始皇本紀第六」である。

太子胡亥襲位。為二世皇帝。九月葬始皇鄜山。始皇初即位、穿治鄜山。及井天下、天下徒送詣七十余万人。穿三泉、下銅而致椁。宮觀百官、奇器珍怪、徒藏滿之。令匠作機弩矢、有所穿近者、輒射之。以水銀為百川江河大海、機相灌輸。上具天文、下具地理。以人魚膏為燭、度不滅者久之。¹⁴⁾

なお「人魚膏」については以下の注釈が加えられている。

異物志にいう、「人魚は人形に似、長さ尺余。

食ふに堪へず。皮は鮫魚よりも鋭利云々」と。
東海や伊水に産したという。その油で家中を
照らし、燈が消えないようにした。¹⁵⁾

鮫は硬質の歯状の鱗で被われているため、この皮を利用して刀の柄や鞘などが作られるが、東シナ海や黄河の支流の渭河に生息する人魚の皮膚が鮫の皮以上に鋭利であること、人魚の肉が食するに堪えられないこと、この『異物志』の記述は「八百比丘尼伝説」などとも異なり注目すべきことである。このことは、中国と日本では「人魚」とされた生物が異なることによるのであろうか、あるいは両国の食文化の違いによるのであろうか。

VI. 江戸時代前期の「人魚」

1. 三浦浄心の『北條五代記』

『北條五代記』は、後北條氏に仕えた武士で後に仮名草子の作者となった三浦浄心（1565年-1644年）によって刊行された『慶長見聞集』（1614年）の中から、後北條氏の早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直五代に関わる逸話を抄録したもので、編者、発行年共に明らかでない。この後北條氏の盛衰を記録した本書は全10巻からなり、「人魚」関連の記述が認められるのは、「巻第七の四」の「東海にて魚貝取盡す事付人魚の事」である。なお『慶長見聞集』では、「巻之一」の「東海にて魚貝取盡す事」に「人魚」のことが記されているが、『北條五代記』の場合と題名は類似しているが、内容は大きく異なっている。

扱又本草綱目に人魚あり。かたち人に似て腹に四足有、ひれのこし。海山河にも有。魚人のあみにかかる。人をそれてくらはすと。むかしみちのく出羽の海浦へ人魚死てなかれよる事度々にをよへり。文治五年の夏そとの浜へ人魚なかれよる。人あやしきことごとく滅亡す。又建保元年の夏秋田の浦へ人魚なかれよる。此よし鎌倉殿へ注進す。此義をはかせにうらなはせ給へは兵かくのもとひと申に付て御祈祷あり。同年五月二日和田義盛大いきあり。建仁三年四月津軽の浦へ人魚なかれ

よる。將軍実朝公悪禪師に害せられ給ひぬ。宝治元年三月十一日津軽の浦へ人魚なかれよるよし注進す。是によて八幡宮にをいて御祈祷あり。同き六月五日三浦泰村か合戦あり。同二年の秋そとの浜へ人魚なかれよるよし風聞あり。其比鎌倉殿の志つけんは北條左近將監時頼なり。此よしをきき、先規不快の義なりとおとろき、みちのくの国司三浦五郎左衛門尉盛時に尋らるるによつて奥州へ飛脚をつかはす所に申て云。去九月十日津軽の浦へ人魚なかれよるといへ共先々三度御注進申。皆もつて不吉の事地下人かくし申上さるのよしを申。此義不快たるにより將軍諸事諸社へ御祈請の事あり。魚の中に人魚有事必定。海人の殺生いふにたえたりと申されし。¹⁶⁾

本書では、李時珍私撰の『本草綱目』にある「人魚」の説明から始まり、鎌倉時代に津軽の海などみちのくに流れついた人魚についての報告が『吾妻鏡』以上に詳細に行われている。当時人魚の出現は、大事件が発生することから凶兆とみなされ、津軽や秋田の海岸に人魚が流れつくと、そのつど鎌倉幕府に報告され八幡宮で祈祷が行われている。これらの記述で注目したいのは、李時珍私撰の『本草綱目』についての説明である。著者の三浦浄心は、林信勝が1607（慶長12）年に長崎で入手した『本草綱目』（1596年）を遅くとも『慶長見聞集』を刊行した1614年までには読んでいたことになる。主家の滅亡後江戸に出て商人となりその後出家した一仮名草子作者の浄心はどのようにして『本草綱目』を入手したのであろうか。なおみちのくに人魚が度々流れつき、そのつど大事件が発生し鎌倉幕府が祈祷したことについては、原本の『慶長見聞集』には全く記されていないが、後に『北條五代記』を編集した人が、記述内容が類似していることから推測して、『吾妻鏡』などを参考に付け加えたのであろう。『慶長見聞集』の「巻之一」より「人魚」に関係する部分を引用する。

本草綱目に云、「人魚あり、形人に似て、腹に四足あり、ひれの如し、よくしやくを治す、海山川にも、魚人の網にかかる人おそれてくら

はず」と云々、仏は物の命を殺事、十悪五逆の始といましめ給ふ、古歌に「むくふへきつみの種をやむすふらん、海士のしはさは網の目とに」とよめり、おそろしき大殺生、言葉に絶たり。¹⁷⁾

「しやく(癩)」を直す人魚の効能については、『北條五代記』には書かれていない。

2. 佐々木氏郷の『江源武鑑』

佐々木氏郷(生没年等不詳、近江の人)は、明暦2(1656)年に『江源武鑑』を刊行する。本書は、全十八巻からなる木版本の歴史書で、人魚に関係する記述があるのは、「巻第四下」の天文19(1550)年4月21日の条である。

廿一日、豊後国大野郡ヨリ、頭ハ人ニテ、足手胴共ニ魚ニテ、ウロコアル物ヲ將軍家ニ献ス。其名ヲ不知。人魚カト云人多。人魚ハ是ニテナシト云。鳴聲ハ鹿ノコトシ。十月計シテ死ス。¹⁸⁾

豊後国(大分県)で、頭が人間、胴体が魚という「人魚」と思われる生き物が捕獲され、足利將軍家に献上され、10カ月で死んだとあるが、この「人魚」の記述で注目したいのは、人魚の鳴き声が鹿の鳴き声に似ていることである。『山海經』など国内外の文献のほとんどが人間の小児の声に類似していると記している。人魚の鳴き声を鹿の声にたとえたのは本書が初めてである。

3. 黒川道祐の『遠碧軒記』

随筆『遠碧軒記』は、黒川道祐(生年不詳、没年1691年)が折りにふれて書き留めた雑記を、難波宗建が宝暦6(1756)年に現在残っているような形式に編集したものである。本書は、全2巻で、各巻は更に上中下に分けられ、さらに「天象」以下「通用」までの二十部門に分類されている。人魚に関係する記述があるのは、「下之二」の「禽獸魚鱉」の部門である。なお著者黒川道祐は、広島藩浅野光晟侯に仕えた医師で、儒学を修め、歴史、文学等に通達していた。主な著書としては、『本朝医学』、『芸備国郡志』、『日次紀事』などがある。

延宝五年十月に、肥前の唐津の海上にて人魚をとれり、又両頭亀をとれり。執権威を争へば両頭亀出ると古文にあり。又元龜二年靈陽院義昭公の、信長公にをしこめられしとき、両頭の亀出づ、先は不吉の例なり。¹⁹⁾

ここには、延宝5(1677)年に佐賀県唐津の海上で、人魚と両頭の亀が捕獲されたこと、両者、特に両頭の亀が出現すると国家を揺り動かす大事件が発生することから、人々は両頭の亀を不吉なことを起こす元凶とみなしていたことが記されている。元龜2(1571)年に足利義昭が織田信長に幽閉された時にも両頭の亀が出現したことが記されているが、足利義昭は2年後の1573(天正元)年に織田信長によって京都を追われ諸国を流浪する。なお両頭の亀は、『鐘奇随筆』によれば、同じ年の延宝5年の6月にも肥前唐津で捕獲されている。

六月、肥前国唐津領内、相木村山中、山の井にて水を汲み、両頭の亀を得たり。長一尺八寸、幅二寸、首左右へ相双て附けり。²⁰⁾

両頭の亀のみならず人魚についてもその出現を凶兆とみなす考え方は、『吾妻鏡』や『武道伝来記』にもみられるように、鎌倉時代以降、少なくとも江戸時代以降においては定着していたと思われる。

VII. おわりに

江戸時代以降の、特に今後分析する予定の明治時代の「人魚」像の解明のために、奈良時代に成立した『日本書紀』から江戸時代前期に刊行された『北條五代記』等の分析を行ってきたが、「人魚」という言葉の使用が確認できたわが国最古の文献は、中国の漢時代の地理書である『山海經』等の影響を受けた漢和辞書『倭名類聚鈔』であった。この古代中国の文献の影響は、『史記』の影響が認められる南北朝時代に成立した軍記物語『太平記』の場合も同様で、これらの事実から判断して、古代中国において刊行されその後日本に伝来した文献が、江戸時代以前の「人魚」像の形成に大きな影響を与えたことは否定できないであろう。一方ヨーロッパ、例えばポルトガルとの関係は、室町

時代末期以降のことであり、オランダとの関係は、さらに遅れて三代将軍徳川家光による「鎖国令」実施以降のことである。江戸時代以前においては、「人魚」像形成に対する影響も、他の日本文化に対する影響同様隣国中国との関係が大きいと思われる。

江戸時代以前の「人魚」像の特徴としては、容姿は人面魚身で四足があり、なき声が小児や鹿のなき声に似ていて、その出現は大事件が発生することから凶兆とみなされている。また効能については、人魚の油が燈油として用いられることである。以上のことから判断すると、江戸時代以前の「人魚」像と江戸時代の「人魚」像の間にはそれほど大きな相違は認められない。このことはおそらく江戸時代に刊行された文献に登場する「人魚」像が、江戸時代以前に刊行された文献の影響の下に形成されたことによると思われる。

明治時代以降の「人魚」像はいかなるものなのか。藤沢衛彦の『日本伝説研究二』の人魚出現の記録によれば、明治時代以降に人魚が日本の海岸に出現したことを伝える文献はない。欧米思想の吸収により文明開化した明治時代以降においては、「人魚」は翻訳された文献、例えばアンデルセンの『人魚姫』など欧米の多くの文学作品、の影響の下に主として文学の領域に登場する。その結果主として本草学の視点から効能が論じられた江戸時代とは異なり、「人魚」は本草学の領域からは分離された存在となる。次号においては、前述のことをふまえて明治時代の「人魚」像について検証することにする。

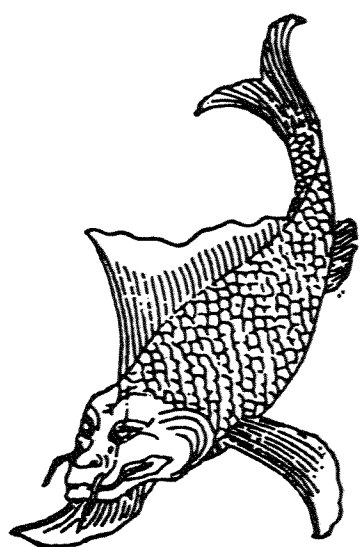
(2006年9月28日受理)

注

- 1) 藤沢衛彦『日本伝説研究二』(六分館, 昭和6年) p. 40-42.
- 2) 小島憲之, 直木孝次郎, 西宮一民, 蔵中 進, 毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集 3, 日本書紀 ②』(小学館, 1996年) p. 575.
- 3) 同前掲書。p. 575.
- 4) 源順『倭名類聚鈔, 卷十九』p. 2.
- 5) 前野直彬『全釈漢文大系第33巻, 山海経・列仙伝』(集

英社, 昭和55年) p. 196-197.

- 6) 同前掲書。p. 51.
- 7) 同前掲書。p. 449.
- 8) 同前掲書。p. 480.
- 9) 同前掲書。p. 306.
- 10) 永積安明, 島田勇雄校注『日本古典文学大系 84, 古今著聞集』(岩波書店, 昭和41年) p. 533-534.
- 11) 国書刊行会編『吾妻鏡下巻』(大観堂, 昭和18年) p. 359.
- 12) 後藤丹治, 岡見正雄校注『日本古典文学大系 36, 太平記三』(岩波書店, 昭和37年) p. 95-96.
- 13) 大槻玄澤『江戸科学古典叢書 32, 六物新志・稿/一角纂考・稿』(恒和出版, 昭和55年) p. 138.
- 14) 吉田賢抗『新釈漢文大系第38巻, 史記(一)』(明治書院, 昭和48年) p. 365-366.
- 15) 同前掲書。p. 367.
- 16) 『改定史籍集覧第五冊, 通記第二十六, 北條五代記』(近藤出版部, 大正14年) p. 162.
- 17) 江戸叢書刊行会編『江戸叢書慶長見聞集全拾巻』(日本図書センター, 昭和55年) p. 26.
- 18) 佐々木氏郷『縮刷江源武鑑全一卷』(弘文堂書店, 昭和57年) p. 84.
- 19) 『日本随筆大成, 第一期 10』(吉川弘文館, 昭和50年) p. 117.
- 20) 白井光太郎『日本博物学年表』(大岡山書店, 昭和9年) p. 74.



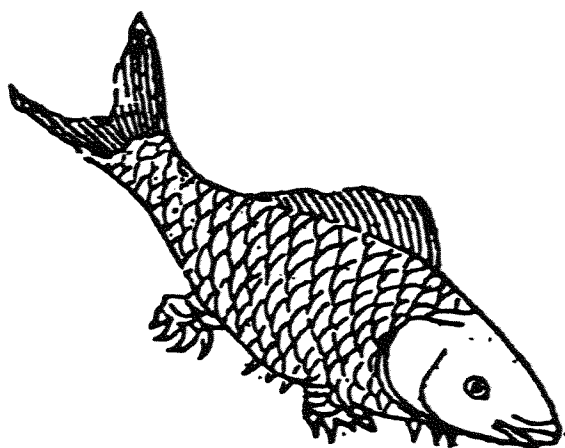
赤鯪(せきじゅ)

『山海経』(平凡社, 1994 年) より



陵魚

『山海経』(平凡社, 1994 年) より



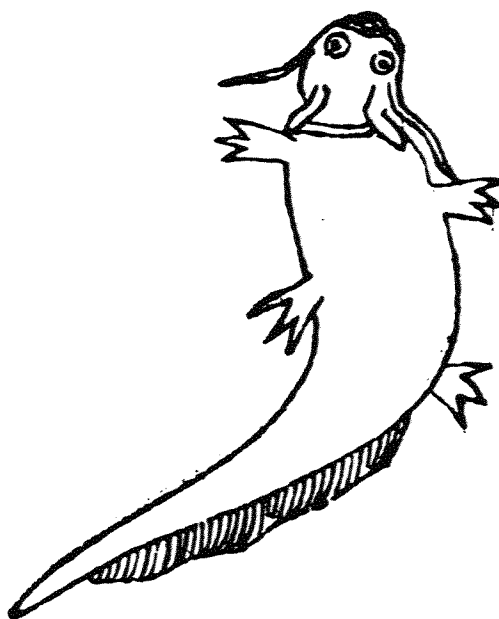
人魚

『山海経』(平凡社, 1994 年) より



氏(てい)人国

『山海経』(平凡社, 1994年)より



〔鯉魚〕

—— 人魚・孩兒魚 ——

李時珍『頭註国訳本草綱目』(春陽堂, 昭和5年)より

Das Bild der „Seejungfrau“ vor der Edo-Zeit : Das Herantreten an den Ausgangspunkt des Bildes der „Seejungfrau“ in Japan

KUZUMI Kazuo

In dem Versuch der Erläuterung des Bildes der „Seejungfrau“ habe ich bisher den Brennpunkt auf die Edo-Zeit, wo die Literatur über die „Seejungfrau“ mehr bestätigt wurde, eingestellt und eine Analyse gemacht. Dieses Mal gehe ich weit in die Geschichte zurück und trete an den Ausgangspunkt des Bildes der „Seejungfrau“ in Japan heran.

Nun wird in diesem kleinen Aufsatz für die Verwirklichung des oben erwähnten Zweckes das Bild der „Seejungfrau“ in folgenden Werken hauptsächlich untersucht und vor allem der Einfluss der Literaturen in der alten Zeit von China, z.B. „Shiki“ von Shibasen und „Sengaikyo“ usw., bestätigt.

1. Die „Seejungfrau“ in der Nara-Zeit : „Nihon-Shoki (日本書紀)“
2. Die „Seejungfrau“ in der Heian-Zeit : „Wamyo-ruijyu-sho (倭名類聚鈔)“ und „Sengaikyo (山海經)“
3. Die „Seejungfrau“ in der Kamakura-Zeit :
 - (1) „Kokon-chomon-jyu (古今著聞集)“
 - (2) „Azuma-kagami (吾妻鏡)“
4. Die „Seejungfrau“ in der Nanpokucho-Zeit : „Taihei-ki (太平記)“ und „Shiki (史記)“
5. Die „Seejungfrau“ in der Anfangsperiode von der Edo-Zeit :
 - (1) „Hojyo-godai-ki (北條五代記)“
 - (2) „Kogen-bukan (江源武鑑)“
 - (3) „Enpekiken-ki (遠碧軒記)“